医甲様式２

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野　氏名	病態制御科学領域消化器内科学教育研究分野 氏名　安田　耕平
指導教授氏名	福田　眞作
論文審査担当者	主　査　　大門　眞 副　査　　鬼島　宏　　副　査　　袴田　健一

（論文題目）

Helicobacter pylori 除菌による FD 症状の改善と体重変化には除菌前の胃炎の程度が関連する

（論文審査の要旨）

上部消化管内視鏡検査などで器質的疾患を認めないが、心窩部痛、心窩部灼熱感、食後のもたれ感、早期膨満感といった上腹部症状を呈する機能性ディスペプシア(functional dyspepsia:以下、FD)の原因の一つとして、*Helicobacter pylori*(*H. pylori*)感染が知られているが、除菌療法にて全例にて FD 症状が改善する訳でもなく除菌後も症状が持続する場合も多い。そこで、申請者は *H. pylori* 除菌療法が FD 症状改善に有効な症例を治療前に予測する事を目的に、除菌治療前の *H. pylori* 感染性胃炎の程度と *H. pylori* 除菌後の FD 症状の改善の関連について検討した。【方法】青森県の多施設共同研究に、2013 年 7 月から 1 年間に登録された 1,201 例が対象。改訂 F スケールを用い（dyspepsia scores 7 点以上(28 点満点)）FD を判定（150 例）し、*H. pylori* 感染陽性者は 72 例(48%)で、胃手術例、プロトンポンプ阻害薬、カリウムイオン競合型アシッドブロッカー、消化管運動機能改善薬内服例を除外。胃炎の程度は血清ペプシノーゲン(以下 PG) I、PG II にて評価した。除菌療法成功後に、改訂 F スケールにての再評価し、dyspepsia scores と total scores のいずれも除菌前の半分以下となった 14 例を(除菌)有効群、それ以外の 19 例を(除菌)無効群と定義し、解析の対象とした。【結果】除菌前の PG 濃度については、有効群は無効群に比べて、PG I は高値、PG II は低値の傾向であったため、PG I/II 比は有効群 3.4±1.2、無効群 2.3±1.0 と有効群で有意に高値であった(P=0.006)。除菌前後での体重変化については、有効群では有意な変化はなかったが、無効群では除菌前 60.9±12.5 kg、除菌後 61.5±12.1 kg と有意に増加していた(P=0.04)。【考察】FD 症状を有する *H. pylori* 感染者のうち、除菌療法が症状改善に有効である症例は、42%存在し、PG I/II 比が有意に高値であった。PG I 低下は胃粘膜萎縮の指標で、PG II は胃粘膜全体の炎症の指標であり事より、本研究の結果は有効群では無効群より胃粘膜萎縮が軽度である事が示唆された。すなわち、胃粘膜萎縮が高度な症例では酸を分泌する壁細胞が減少しているが、胃粘膜萎縮が軽度な場合は除菌除菌による胃酸分泌能の回復が大きく、これによる胃排出遅延の改善が大きく、FD 症状の軽快に寄与したと考えられた。

以上より、本研究は、FD 症状を有する *H. pylori* 感染者のうち胃粘膜の炎症や萎縮が軽度な症例では除菌による FD 症状の改善が期待できる事を示した臨床上有用なものであり、その意義は高く、学位授与に値する。

公表雑誌等名	消化と吸収 2021;43(2):165-169